論文

魏曹操高陵の孝子伝図

――申生図を中心に――

黒田　彰

〔抄録〕

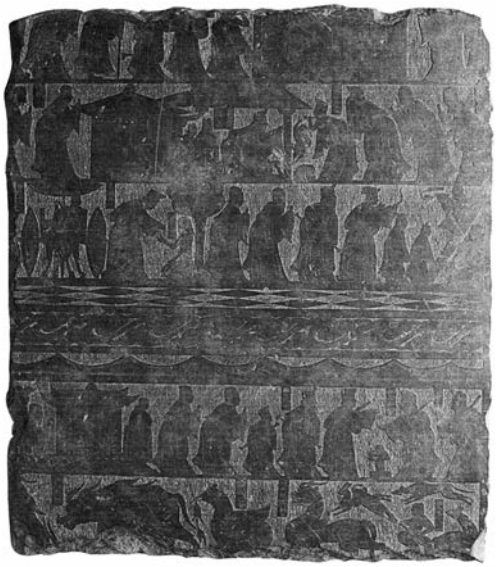
近時、魏の曹操高陵（河南省安陽県安豊郷西高穴村）が発見されたことは、日中両国において大変な評判を呼んだが、二〇一六年に河南省文物考古研究院『曹操高陵』が刊行されるに及び、漸くその全貌が明らかとなった。思い懸けないことに、曹操（一五五―二二〇）の墓室は、漢代と同様、画象石で飾られ、孝子伝図が描かれていたらしい（破壊されているので、今後の考証、復元を必要としている）。

小稿は、その高陵の孝子伝図が、申生、金日磾、伯瑜などの図像に外ならず、特に申生図が研究史的に極めて大きな学術的価値を有しようこと、金日磾図もまた、非常に珍しく、注目すべきものであることを論じる。併せて、その画象石が孝子伝図に加え、列女伝図、列士伝図などの構成をもつ、石室であったと推定されることに言及する。

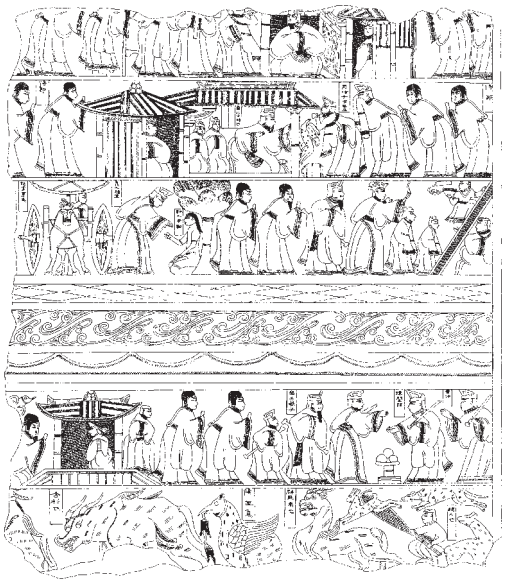
キーワード　曹操（高陵）、孝子伝図、申生図、金日磾図、伯瑜図

一

かつて『文化安豊』（二〇一一年）という書物を繰っていて[1]、驚くべき図像を目睹した。それは中国の三国時代、魏の曹操（一五五―二二〇）の墓（M2）から出土した画象石で、五層に分かたれたその第二層の図像は、漢代孝子伝図の一つとしての申生図そのものに外ならなかったからである[2]（図一）。第二層の図像には、明らかに榜題（題記）部があり、特にその右から二つ目の題記の下部をよく見ると、「申生」とあるようで、そのことが非常に気になった（後述）。その後、『曹操高陵』（二〇一六年）が公刊されるに及んで[3]、本画象石（図



図一　申生図（曹操高陵出土画象石２層）



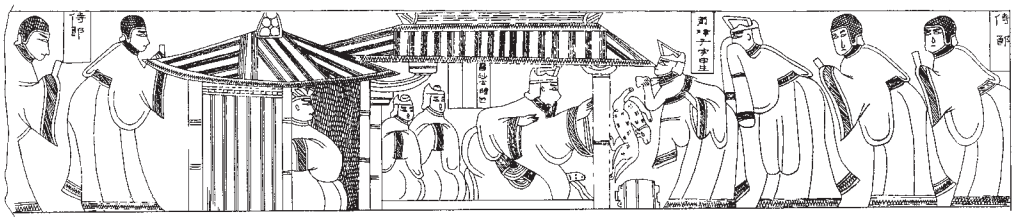
図二　申生図（曹操高陵出土画象石２層、摸図）

一）の精確な摸写図が公開されると共に[4]（図二）、その四つの題記も報告され（二つ目の題記は、確かに「前婦子字申生」であった）、第二層の図像の内容が、「従故事内容来看、応当是春秋時期晋献公聴信驪姫讒言、冤殺太子申生的故事」（232頁）と断じられたことは[5]、曹操高陵からの申生図の出現という、画期的な事実を、揺るぎのないものとしたのである（驪姫の驪には、様々な綴りがあるが、小稿では、驪姫〈史記晋世家等〉の表記に従う）。

私はかつて日本伝存の二種の完本孝子伝（陽明本、船橋本）の注解に従事した折[6]、孝子伝テキストと世界的に伝存する、豊富なその図像（孝子伝図）との関係に気付き、その対照リストを作成していて、取り分け一九九〇年代における、研究史上、始めてとなる申生図の発見に瞠目させられたことがある[7]（後述、王恩田論文、東野治之氏教示）。その具体的な内容については、旧拙稿「申生贅語―孝子伝図と孝子伝―」（平成15年）において述べた如くであるが[8]、今般の曹操高陵からの申生図の出現は、私にとってその時の衝撃に次ぐ、二度目の驚愕を齎すものだったのである。そこで、小稿においては、少しく具体的にその新出申生図の図像内容を考察すると共に、そこに看取される一、二の問題及び、新出申生図の学術的意義に関し、孝子伝図研究の見地から述べてみたく思う。

これまで管見に入った孝子伝図としての申生図には、五例の図像があり、そこに今般の曹操高陵のものを加えた六例のそれを、一覧として示せば、次の通りである。

(1)後漢武氏祠画象石（武梁祠三石４層。後掲図四）



図三　曹操高陵出土画象石（申生図。(6)）

(2)泰安大汶口後漢画象石（二石〈三幅の孝子伝図の右辺〉。図五）
(3)嘉祥宋山一号墓画象石（二石3層。図六）
(4)嘉祥宋山二号墓画象石（一石3層。図七）
(5)山東肥城後漢画象石（東壁4層。図八）
(6)曹操高陵出土画象石（2層。図三）

その内、まず(6)曹操高陵出土画象石二層の申生図を図二から取り出し、改めて掲げ直せば、図三のようになる。図三と比較すべく、続けて(1)―(5)の図像を、主に拓本（及び、摸写図）により掲げたものが、図四―図八である[9]（図七上は、原石写真）。図三―図八を通覧すると、新出の図三は、図四―図八と殆ど同じ構図を持ち、特に図三の画面中央の引っ繰り返った犬が、図六、図七（また、図八左〈後述、毒を食う犬〉）と共通することなど、申生図としての特徴を有することが明らかである。

二

さて、図三―図八のような申生図は一体、如何なる文献に基づいて描かれたのであろうか。例えば、宮崎市定氏はかつて、史記晋世家に見える申生、重耳の物語について

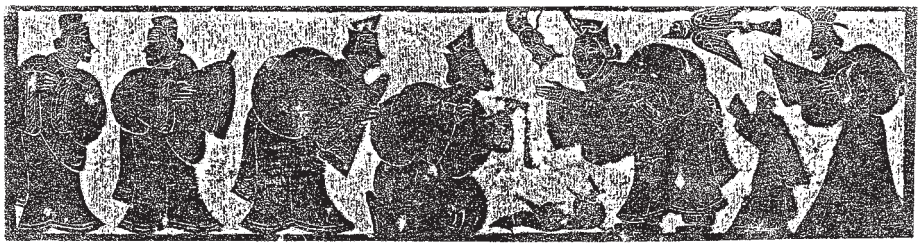
晋世家に見える文公の記述は、春秋左伝に基づいているが、正に一篇の小説である。父の献公は後妻の驪姫に惑わされ、その子奚斉に位を譲ろうとし、太子を殺したので、次子の重耳、後に文公となる人は難を避けて出奔し、諸国を遍歴する。このような遍歴談は元来は娯楽的な語り物であったので、どこまで史実を伝えたものか分からない（『史記を語る』Ⅳ世家）

と指摘されたことがあるが[10]、「正に一篇の小説」としての文学的な特質に注目すべく[11]、例えば申生の物語の面白さは、群を抜いたものがあって古来、余りにも有名なものであり、今日それを載せる文献は、枚挙に遑がない。その主要なもののみを列挙してみても、

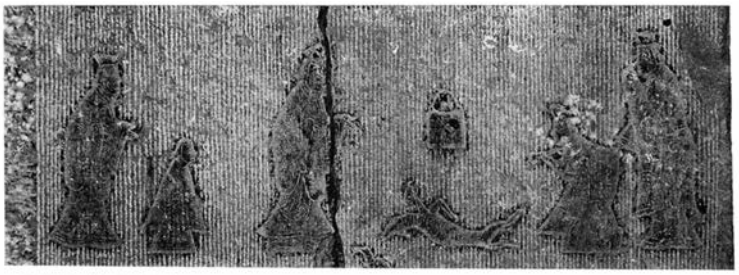
・春秋穀梁伝僖公十年
・春秋左氏伝荘公二十八年、僖公四年
・国語晋語
・呂氏春秋十九上徳
・礼記壇弓上
・史記晋世家
・説苑四立節
・列女伝七・7

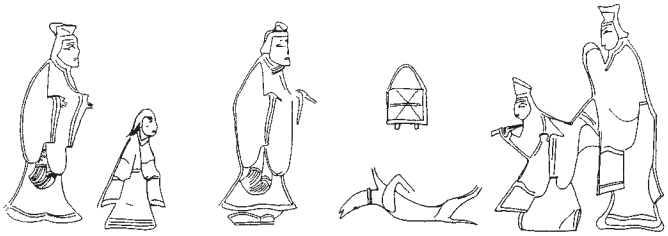
図四　武梁祠画象石（下、摸図。(1)）

図五　泰安大汶口後漢画象石(2)



図六　嘉祥宋山一号墓後漢画象石(3)





図七　嘉祥宋山二号墓後漢画象石（下、摸図。(4)）

図八　山東肥城後漢画象石(5)

等の多岐に亙っているのである。すると、例えば上掲図三―図八のような申生図は、それらの書物に適宜、基づいてその図像が描かれたのだろうか。おそらくそうではない。後漢、王延寿の「魯霊光殿賦一首并序」に、

下及三后姪妃乱主忠臣孝子烈士貞女一、賢愚成敗、靡レ不二載叙一

という記載のあることは（霊光殿は、漢恵帝の王子、魯恭王餘が魯〈山東省〉の地に建てた宮殿）、よく知られているが、その「孝子」に関する晋、張載による貴重な古注（文選、李善注所引）に、

孝子、申生伯奇之等

とされる通り、当時の宮殿には孝子、列女、列士などの図像が屢々描かれていた。そして、死後も現世と殆ど変わりのない世界が続くと考えられた、中国古代以来の来世観念によって孝子、列女、列士等の図像は、当時の墓域、墓中にも持ち込まれ、殆どそのままの内容で、墓室等の内部を飾ったのである。従って、例えば図三―図八のような申生図も、孝子伝図として捉えられなければならないことは、申生図の今日における伝存を、世界的に知らしめることとなった、最重要資料の一、(2)泰安大汶口後漢画象石の申生図（図五）が、その図中やその左に、慈烏図（陽明本孝子伝45）、丁蘭図（同9）、董永図（同2）、趙苟図（師覚授孝子伝）を従えている事実が、何より雄弁に証拠付けている通りである。加うるに、新出の本図（図三）の場合も、韓伯瑜図（同4）の同時出土が報告されている[12]（題記「孝子伯榆（瑜）□（母）」。後掲図十四）。そこで、小稿は、そのような見地に立って、図三―図八の申生図を、孝子伝図の一として捉えようとするものである。

残念なことに、中国本土において孝子伝が堙滅に帰してしまった現在、私達が参照出来る孝子伝本文は、極めて少数のものに限られる。中で、日本伝存の完本孝子伝二種の第三十八条に、その本文が録されていることは僥倖とすべく、なお唐、于立政撰類林の逸文中に、その一条を存していることも貴重で、今その三本の本文を併せ掲げれば、次の通りである。[13]

陽明本

申生者晋献公之子也。兄弟三人、中者重耳（呵）、少者夷吾。母曰斉（音）姜、早亡。而申生至孝。父伐麗戎（娘）、得女一人、便拝為妃。賜姓騏氏、名曰麗姬。々生子（孝）、名曰奚斉（音）卓子。姬懐妬之心、欲立其子斉（音）以為家嫡。因欲讒之、謂申生曰、吾昨夜夢汝母飢渇弊。汝今宜以酒礼至墓而祭之云。申生涕泣、具弁肴饌。姬密以毒薬置祭食中、謂言申生、祭訖食之則礼（死）。而申生孝子、不能敢飧。将還献父、々欲食之。麗姬恐薬毒中献公、即投之曰、此物従外来。焉得輒食之。乃命青衣、嘗之入口、即死。姬乃詐啼叫曰、養子反欲殺父。申生聞之、即欲自殺。其臣諫曰、何不自理。黒白誰明。申生曰、我若自理、麗姬必死。父食不得麗姬則不飽（飫）、臥不得麗姬則不安。父今失麗姬、則有憔悴之色。如此、豈為孝子乎。遂感激而死也。

船橋本

申生晋献公之子也。兄弟三人、中者重耳、小者夷吾。母云斉姜、其身早亡也。申生孝。於時父王伐麗戎、得一女便拝為妃。賜姓則騏氏、名即麗姬。々生子、名曰奚斉。爰姬懐妬心、謀却申生、欲立奚斉。姬語申生云、吾昨夜夢見汝母飢渇之苦。宜以酒至墓所祭

之。申生聞之、泣涕弁備。姫密(蜜)以毒入其酒中、乃語申生云、祭畢即飲其酒、是礼也。申生不敢飲、其前将来献父。々欲〔飲〕之、姫抑而云、外物不輒用。乃試令飲青衣、即死也。於時姫詐泣叩曰、父養子、々欲殺父耶。申生聞之、即欲自殺。其臣諫云、死而入罪、不如生而表明也。申生云、我自理者、麗姫必死(ヽ)。無麗姫者、公亦不安。為孝之意、豈有趨乎。遂死也。

類林所引逸名孝子伝

晋申生〈献公先娶斉女為后。生太子申生。斉女卒。乃立驪姫為后。生子(×)奚斉及卓子。驪姫欲立奚斉為太子。讒申生於公(主)曰、妾昨夜夢申生之母従妾乞食。公(主)信之。即令申生往其母墓祭之。申生祭還。驪姫潛以毒薬安肉中。申生欲上公祭肉。姫謂公曰、蓋聞、食従外来、可令人嘗試之。公以肉与犬、犬死。与婢、婢死。姫曰、為人之子者、乃如此乎。公以垂老之年、不得終天之年。而欲毒薬殺而早図其位。此時非但殺公、亦当及于諸子。請将二子自飧於狐狢之地。無為被太子見其魚肉也。公大怒、賜申生死。大夫李克謂申生曰、何不自治。申生曰、吾父老矣。臥不得姫則不安、食不得姫則不飽。吾若自治、公則殺姫。為人之子者、殺父所(父)安、非孝也。遂自縊而死。出孝子伝〉

三

孝子伝図としての申生図が世に出たのは、そんなに昔の話ではない。申生図というものの伝存が、広く世界に知れ亙ることになったのは、(2)泰安大汶口後漢画象石（図五）の公開と（一九八四年。出土したのは、一九六〇年6月）、そのことをきっかけとする、王恩田氏による「泰安大汶口漢画像石歴史故事考」の公刊に負う所が大きい[14]（一九九二年）。前掲図四―図八の五図の申生図の内、文字題記を伴っているのは、ただ図五（2）の一例に過ぎず、(2)の出現が研究史上、始めてとなる文字証拠を伴う申生図の出現を意味したことから、申生図というものの現存が確定したのである。そして、この度の(6)曹操高陵出土画象石のそれ（図三）も、やはり(2)と同様、極めて貴重な文字題記を伴っている。小稿では、新出(6)の申生図（図三）の学術的意義を、まずその文字題記から探ってゆきたい。

図九は、(2)泰安大汶口後漢画象石の申生図（図五）における、三つの題記部分を右から、a、b、cとして掲げたものである。そのa、b、cは、これまで専ら王恩田氏の説に従って、

a 此浅(献)公前婦子
b 此晋浅(献)公見離(麗)算
c 此後母離(麗姫)居（也）

と判読された（但し、王氏は、bの五文字目を貝と見、被の音通とされる）。問題は、二つあって、一つは、献公に該当する、献字をめぐるもので一見、「沙」に見える、aの二文字目とbの三文字目の文字を、王氏は、「第3字従水、従戈、為〝浅〟字省文、非沙字。浅、献古音均属元部、音近相通」（73頁右）と述べて、浅と解読された。もう一つは、驪（麗）姫に該当する二文字をめぐるもので、cの五、六字目の離居（及び、bの六字目の離）を、離は、麗（驪）に通じ、居

図九　(2)題記

は、姫に通じるとして、離居を驪（麗）姫の宛字と考えられた。中で、後者は、現代音においても、麗、離は、lì（また、lí）、姫、居は、jiと同音なので、従うべき卓説と思われる。しかし、前者の浅を献の通字として良いかどうかには、疑問が残ったが、さりとてそれに代わる案も浮かばず、王氏の説に従うこととした。

さて、研究史的に見て、(2)（図五）と同様、新出の(6)曹操高陵出土画象石（図三）にも、題記のあることが、極めて貴重且つ、重要で、(6)の出現はまた、申生図における、第二の文字題記を持つ、図像の出現をも意味する点に、是非共留意すべきである。その(6)（図三）には、四つの題記が残り、それらは右から、

a 侍郎
b 前婦子字申生
c 晋沙公時也
d 侍郎

と判読される。就中、bの末尾に、「申生」の二文字が見えることの学術的意義は、甚だ大きい（図十）。(2)の題記を想起しよう。それらには、浅公、離居の二人の人名が見え、その離居は、驪姫の意味であろうことは、おそらく疑いないが、遺憾乍ら、浅公、離居の字形というものは、直接に申生の物語を差すものではない。そこには一旦、それらが献公、驪姫を差すであろうとの解釈の挿まれる必要があり、その他、例えば図五の図像内容などの場合も、全く同じことである。だから、端的に言えば、如何に蓋然性が高くても、(2)（図五）は、申生図であろうとの推測に留まらざるを得なかったのである。ところが、新出(6)の題記b（図十）の末尾二文字「申生」の場合は、(2)の浅公、離居のケースとは、少しく次元が異なる。それは、図三における、右から四人目の人物が、直ちに申生であることを意味し、延いては、図三全体が申生に纏わる図像であることを示唆し、そこに(2)のケースのような、例えば字形をめぐる解釈などが介在する余地は、全くない。即ち、図三の出現、取り分け、その題記b（図十）の終わりの二文字、「申生」の語の出現は、後漢時代以前に確実に申生図が存していたことの、始めての直接的な証拠と見做される点、新出(6)の申生図（図三）の学術的価値を考える際に、まず最初に指摘しておくべき事柄であると思われる。そして、その事実は、すぐ(2)また、(1)、(3)―(5)の諸図（図四―図八）へも波及して、後漢以前における、孝子伝図としての申生図の研究の、今後の展開を基礎付ける役割を、持つことになるであろう。

図十　(6)題記b

かく(6)題記b（図十）によって、当時の申生図の存在が確認され、(2)のそれ（図五）の資料的価値が、改めて再認識されることになると、

同時に問題化するのは、(2)題記（図九）a、bの二文字目と三文字目に見える、「浅」字の解釈法の当否の問題である。(6)（図三）の出現、特にその題記b（図十）の出現によって、(2)（図五）の申生図であることが確定すると、(2)題記（図九）bの六文字目とcの四文字目等は、やはり「驪（離）〔姬（居）〕」と断じて誤りのないことが知られ、それは、王氏の説の卓抜さを示すものである。一九九二年の王恩田論文が、中国においても高く評価されたことは、例えば二〇〇〇年に刊行された、中国画像石全集1山東漢画像石の図版二三〇（176、177頁）が、(2)題記（図九）a、b、cを釈して、

〔此〕浅（献）公前婦子

此晋浅（献）公貝（被）離（驪）算

此後母離（驪）居（姬）也

とすることなどから知られるが[15]（図版説明二三〇、76頁）、その浅字の再考を促すのが、(6)曹操高陵出土画象石の申生図（図三）に記された、右から三つ目の題記cである。

四

図十一は、(2)泰安大汶口後漢画象石の申生図（図五）の題記a、bと、(6)曹操高陵画象石のそれ（図三）の題記cとの三つの題記を並べ掲げたものである。その(2)a二、三文字目とb三、四文字目に、件の「浅（献）公」の語が見えている。王氏は、(2)a二文字目とb三文字目に対し、

図十一　題記(2)a、b、(6)c

第3字従水、従戈、為〝淺〟字省文、非沙字。浅、献古音均属元部、音近相通。晋浅公即晋献公（73頁右）

と考証して、それらを浅と解釈され（浅、献の古音が元部に属することは、間違いない〈但し、子音は異なっている。三木雅博氏教示〉）、私の旧稿も、王氏の説に従った。

さて、新出(6)cの題記二、三文字目にも、同じ語が見え、王氏の説に従えば、これも「浅（献）公」となる筈だが、果してそうか。図十一左、(6)cのそれは、どう見ても、「沙公（晋沙公時也）」としか見えない。そもそも(2)a、bにした所で、王恩田論文の三年前に出された報告書「泰安大汶口漢画像石墓」（『文物』89・1、一九八九年）においては、

a 此沙公前婦子

b 此晋沙公貝離莫

c 此後母離居也

とあるように[16]（81頁右）、それらは共に、「沙公」と読まれていたのである。すると、今般の(6)c題記（「晋沙公時也」）の出現により、再び(2)a、b題記のそれも、「沙公」であった可能性が出て来るだろう。即ち、問題は、振り出しに戻ったことになる。そのため、私は初心に返り、献公と沙公との関係、つまり献と沙との関係を、改めて考え直

す必要に迫られた。手始めに大漢和（諸橋『大漢和辞典』）の献字の所を繙いてみて、非常に驚いた。思い掛けないことに、献の字には、かつてサ suo の音があったと言う（因みに、私の常用する『新字源』の献字の項には、ケン（コン）の音しか出て来ない〈『角川大辞源』にはサの音も出る〉）。ここで、献と沙の字について少し考証してみよう。

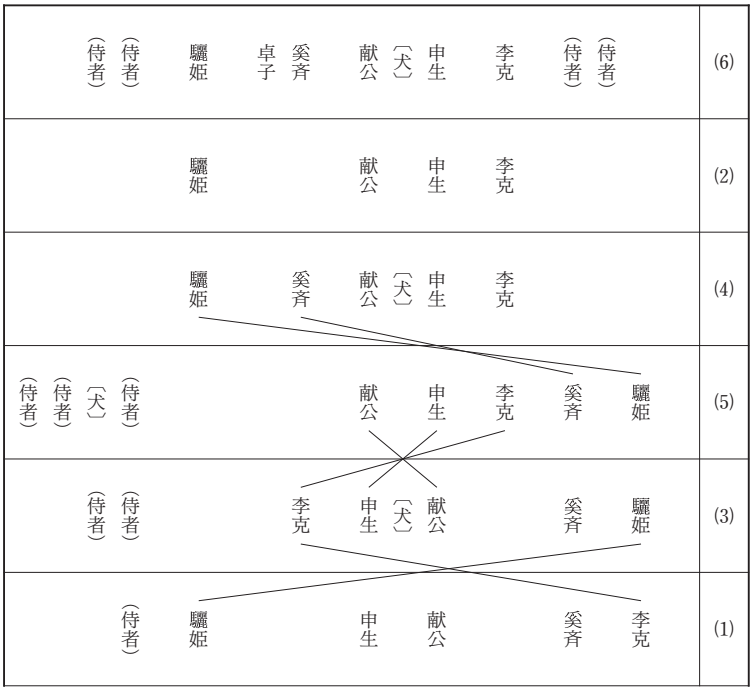
献という字には、古くサという音があった（礼記二十六郊特牲十一「汁献」の鄭注に、「献、読当為莎」、経典釈文十二、礼記音義二に、「献。依注為莎、素何反」、礼記三十一明堂位十三「周献豆」の疏に、「正義曰、献音娑」などとある）。それは、多く翡翠で飾られた酒尊の意の場合の音とされ、献の字をめぐっては、そもそも古来から献尊（樽）、犠尊、戲尊などと表記される、祭儀のための酒樽が存していて、それらは全て、サソンと発音されていたらしい（周礼二十春官、司尊彝「其朝践用両献尊」の鄭注に、「鄭司農云……献読為犠、犠尊飾以翡翠」〈鄭司農は、後漢の鄭衆のこと。大司農の官に就き、後鄭の鄭玄に対し、先鄭と称される〉、経典釈文八、周礼音義上に、「両献、本或作戲、注作犠、同素何反」、集韻三、平声三戈八の「娑。桑何切」下に、「犠、献、戲。酒尊名、飾以翡翠、鄭司農説、或作献戲」などとある）。また、沙の字も犠に通じるとされ（康熙字典巳上水四に、「沙……又与犠通」とある）、犠尊は、鳳凰を描いた酒尊のこととする説があって（詩経二十之二魯頌閟宮「犠尊将将」の毛伝に、「犠尊有沙飾」、礼記三十一明堂位十四「尊用犠象」の鄭注に、「尊、酒器也。犠尊以沙羽為画飾」、疏に、「犠読如沙、沙鳳凰也」などとある）、さらに沙の字は、献にも通じるとされていたから（儀礼十六大射七「両壺献酒」の鄭注に、「献読為沙」、疏に、「献、沙也」などとある）、尊としての実態はよく分からないものの、献（犠）と沙との間には、古く深い関連があり、互いに通じていたことが確認される。このことから、題記を有する(2)、(6)の申生図において、献公が沙公と表記されることは、誤記などでないことは勿論、単なる宛字（あてじ）ではなかったことが知られるのである。

しかし、献公が、何故サコウと発音されたのか、理由はよく分からないものの、例えば周礼二十司尊彝「鬱斉献酌」の鄭注に、「献、読為摩莎之莎、斉語声之誤也」という、興味深い説が見えていて（趙超氏教示。鬱斉は、鬱鬯（うっちょう）（鬱金香草）の酒を調和案配したもの、献酌は、威儀のある柄杓の意）、それによれば、献字のサ音は、もと斉（山東省）の地方音に過ぎなかった発音法が、正式な音として採用されるに至ったことから、生じたものと考えられる。晋献公は、名を詭諸と言い、春秋時代の晋の十九代の君主であって、献公は、その諡号である。すると、献（けん）の意味は、本来は賢君の意であろうが（逸周書〈汲冢周書〉六謚法解五十四に、「聡明叡哲、曰献」などとある）、或いは、その献字が、鳳凰ないし、翡翠（川蟬か）で飾られた酒樽の意に解され、サコウの音や、沙公の表記を生じたものと思われる。

ともあれ、新出の(6)（図三）の題記の検討を通じ、まずそこに「申生」の語が記されることから、(2)を含む(1)及び、(3)―(5)（図四―図八）の五図が、孝子伝図の申生図に外ならなかったことが確定し、さらにまた、(2)、(6)の題記に共通して見える（図十一）、沙公が献公（孝子伝）であることの確認される点の、孝子伝図研究における学術

的意義は、甚だ大きい。さて、図三（6）の中央には、転倒する斑犬（ぶちいぬ）が描かれているので（図六〈3〉、図七〈4〉も同様。図八〈5〉は、毒肉を与えられようとする犬）、類林所引逸名孝子伝の、「公以肉与犬、犬死」に基づくものらしい[17]（穀梁伝に、「以脯与犬、犬死」と見える。両孝子伝にこのことが見えないのは、早い時期における脱落であろう）。その犬の右に描かれるのが申生で、左に描かれるのが献公であることは、b、cの題記からも明らかで（b「前婦子字申生」、c「晋沙（献）公時也」）、その申生は、短剣を喉に擬し、今しも自殺しようとする場面である（図五〈2〉、図六〈3〉、図七〈4〉も同じ）。これは、陽明本孝子伝に、「申生聞之、即欲自殺」とある記述に基づくものである（船橋本も同じ。穀梁伝に、「吾寧自殺……刎脰而死」と言う〈脰（とう）は、首のこと〉。但し、類林所引孝子伝には、「遂自縊而死」とあって、一致しない）。犬は、描かれない場合があるが（図一〈1〉、図五〈2〉、図八〈5〉）、例えば図三（6）の画面中央に配された、申生（右）と献公（左）とは、申生図の中心をなすものである（図五〈2〉、図七〈4〉、図八〈5〉も同じ）。また、申生の右に描かれるのは、李克（類林所引逸名孝子伝。穀梁伝に、「世子之傅里克」と見える。世子は申生）であろう（図五〈2〉、図七〈4〉、図八〈5〉も同じ）。さらに図三（6）の献公の左に坐す二人は、奚斉と卓子であろう。図七（4）の献公の左には、奚斉が描かれる（図五〈2〉、不見）。献公の左、奚斉、卓子を挟み、屋内に坐す女性が驪姫であることは、図五（2）の献公の左に立つ女性が驪姫に外ならないことから（2）題記c「此後母離（驪姫）居（也）」）、まず動かない（図三〈6〉、図七〈4〉も同じ）。なお図三(6)の画面左右両端には、各二人の侍者が配される。そして、図八（5）は、例えば図七（4）画面左の奚斉、驪姫を、図八（5）画面右の李克の右へと反転させて驪姫、奚斉とし、画面左に、三人の侍者（と犬）を置いている。その図七(4)の、右から

李克―申生―犬―献公―奚斉―驪姫



図十二　申生図(1)―(6)の人物配置

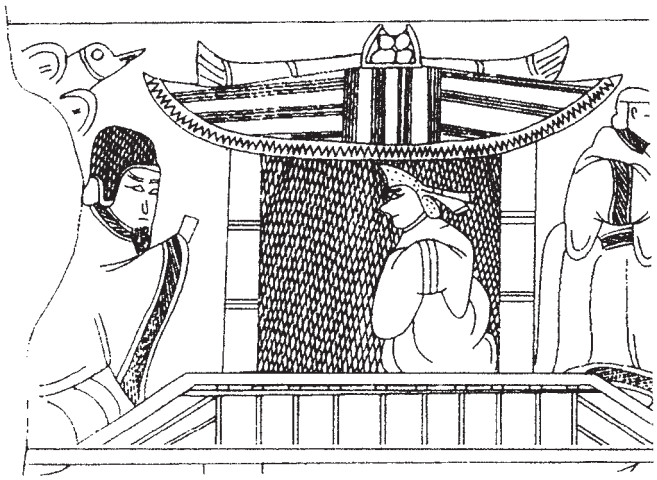
を全て左右反転させて、右から

驪姫―奚斉―献公―犬―申生―李克

とするのが、図六（3）である（画面左に、二人の侍者を置く）。また、図四（1）は、その図六（3）の、驪姫と李克を入れ替えた形となっている（但し、犬は描かれず、驪姫の左に侍者を置く）。そのような遺品(1)―(6)の申生図（図三―図八）における、人物の配置を一覧として示せば、図十一のようになる（(6)を一段目とし、以下の(1)―(5)の順序は、人物の配置により適宜、それを改めてある）。

五

曹操高陵から出土した孝子伝図には、申生図（図三）の他、その下の第四層右に描かれる（図二〈図一〉）、金日磾図に注目すべきである。図十三は、その金日磾図を掲げたものである。[18] 金日磾は、匈奴の休屠王の太子で、霍去病に敗れて母子共々、漢に降り奴隷となった後、漢武帝に見出だされて重用され、その無二の忠臣となったという異色の人物である（漢書六十八金日磾伝三十八）。武帝は、金日磾の母の像を描き、甘泉殿に掲げさせた所、金日磾は、甘泉宮に参る度にそれを拝し、涙を流して長く立ち去らなかったと言う（漢書金日磾伝、論衡乱竜篇）。金日磾図は、その話を描いたもので、現存する金日磾図は、纔か二例に過ぎず、図十三の出現は、極めて注目すべき、重要な出来事としなければならない。図十四は、その二つの金日磾図を示したもので、上は武梁祠三石2層の、下は、和林格爾後漢壁画墓北壁1層の



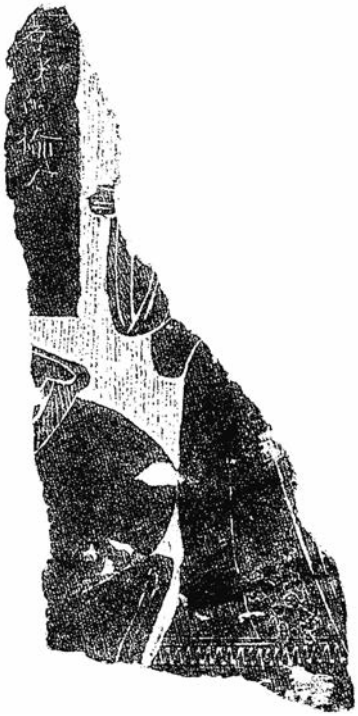
図十三　曹操高陵出土画象石（金日磾図）

それを、共に摸写図によって掲げたものである。[19] （上、榜題左から「騎都尉」「休屠像」）、下（「翁叔」「甘泉」「休屠胡」）。図十二に榜題、題記の類のないことが惜しまれるが、本図が金日磾図であることは、図十四上下のそれと比較すれば、直ちに明らかと言えよう。図十三は、画面左に金日磾、右に母（の像）を描いたものであり、中央の建物は、甘泉殿に外ならない（図十四上下も同じ）。そして、本図は、建物の外に金日磾を描いている点、下の和林格爾後漢壁画墓のそれと構図が全く同じであることに注意すべきである。[20] （上の武梁祠の金日磾は、建

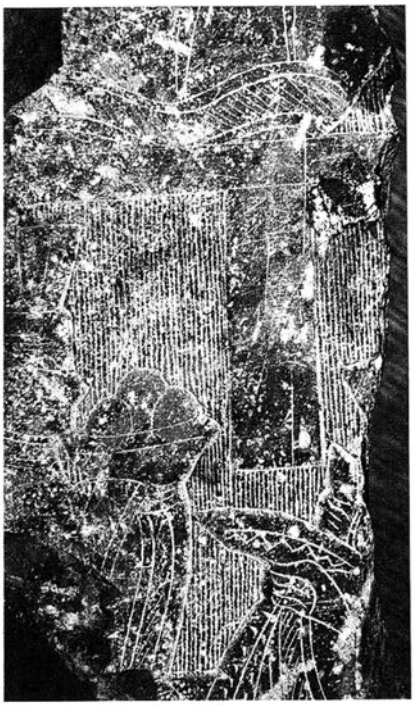
図十四　金日磾図（上、武梁祠、下、和林格爾後漢壁画墓。共に摸図）

物の中に描かれている）。金日磾図が孝子伝図であることは、図十四上下の二図から明らかな事実であるが、その孝子伝本文は、遺憾乍ら逸して今に伝わらず、ただ論衡乱竜篇の一条の記事のみが纔かにその面影を伝えるのみである。かく情報の乏しい金日磾図の研究状況を鑑みるに、今般の図十三の出現は、今後のその展開に、大きな力を与えるものである。画象石の断片ではあるが、伯瑜図もある[21]（図十五、題記「孝子伯榆（瑜）□」）。それは、陽明本孝子伝4伯瑜によったものに違いない。目下、管見に入った曹操高陵の孝子伝図は、申生図と金日磾図、伯瑜図の三例に過ぎないが、前掲『曹操高陵』（二〇一六年）の頁を繰っていると、孝子伝図以外に、列女伝図、列士図などの図像も、屢々目に止まるのである。小稿を結ぶに当たり、それらを簡単に紹介した上で、例えば申生図（図三）などは一体、曹操高陵の何処に描かれていたのか、という問題に触れておきたい。

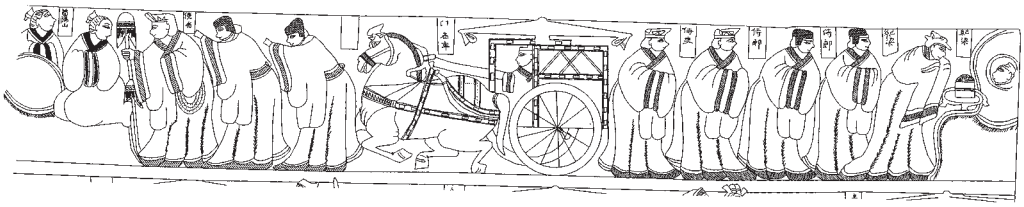
曹操高陵出土の列女伝図としては、以下のような図像が描かれてい



図十五　伯瑜図



図十六　周室三母図（右）、梁寡高行図（左）



図十七　斉杞梁妻図（右）、伯夷叔斉図（左）

図十八　魯秋潔婦図（左）

たらしい。

・周室三母図（列女伝一6）
・斉杞梁妻図（列女伝四8）
・梁寡高行図（列女伝四14）
・魯秋潔婦図（列女伝五9）

図十六―図十八は、それら四図の列女伝図の断片を掲げたものである。[22] 図十六右は、周室三母図の一部らしく（題記「文王十子」）、太姜、太任、太姒の三母の第三、太姒の図と思われ、本文には、伯邑考、武王発などその十子の名が上がる。図十七は、所謂七女復仇図の上層を示したものである。図十七右は、斉杞梁妻図である（榜題右から「紀梁」「紀梁□」「侍郎」「侍郎」「侍史」）。その左は、伯夷叔斉図であろう（榜題左から「首陽山」「使者」「□」「□者車」）。但し、これは、列女伝図ではなく後述、列士図に属している。図十六左は、梁寡高行図の断片である（榜題「梁高行」）。図十八左は、魯秋潔婦図の原石と模図を掲げたものである。[23] 榜題等はなく、また、右は、何らかの列士図らしいが、未勘である。

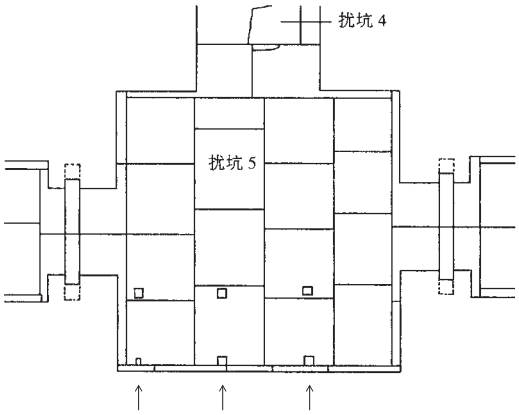
列士図としてまず目に止まるのは、改めて図像を掲げることはしないが、申生図の下、図二

（図一）の第三層左に描かれる、趙盾図であろう（題記左から「趙宣車馬」「義人趙宣」「餓人霊輒」）。趙宣（趙宣子）は、晋の趙盾のことで、宣子は、その諡である（春秋左氏伝宣公二年など）。その右の図像が大変興味深い。私はかつて同類の図像を、舜ないし、伯奇のものと推測したこともあったが[24]、今一つ確信を持てずにいた。ところが、最近同類の図像群をめぐって、著しい研究の発展を見、例えば第三層右のような図像を、韓朋貞夫図とする考えが、極めて有力となっており[25]、従うべきかと思われる。また、図二（図一）第四層も列士図である（題記右から「管仲」「陳閼強」「斉王晏子」）。題記「管仲」には、不審が残るが、これは、所謂二桃殺三士の話を描いた列士図で（晏子春秋二内篇諫下二・二十四など）、陳閼強は、田開疆であろう[26]。また、図十四左に、伯夷叔斉図の描かれていること、及び、図十七の右も列士図であろうことは、前述した通りである[27]。

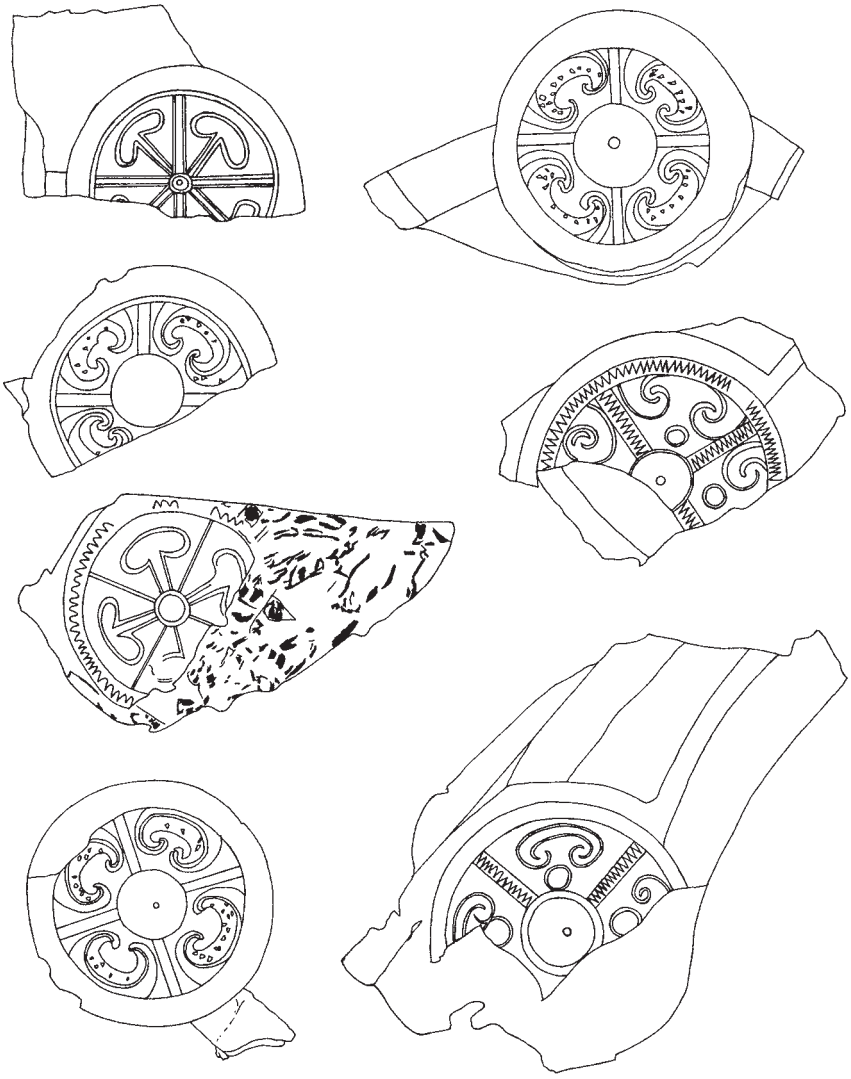
以上は、曹操高陵の画象石の中から、孝子伝図、列女伝図、列士図と思しき図像を、目に付くまま列挙してみたに過ぎない。中には、例えば図一（図二）のように、纏まりを持った画象石も二、三存するが、それらも含めて曹操高陵の画象石が目下、全て断片となっている現状は、過去におけるその破壊の激しさを物語るものである。しかしながら、それを瞥見してみただけでも、その画象石の内容の重要さを窺うに十分なものがある。例えば後漢以降の陵墓において、特に皇帝クラスのそれにおいて、内部に孝子伝図、列女伝図、列士図などが描かれたものは、これまで見たことがない。その一事を以ってしても、例えば申生図（図三）、金日磾図（図十三）などの出現が孝子伝、孝子伝図研究史にとって、画期的な意義を有することは、容易に看て取れよう。今後の研究のさらなる進展が、切に俟たれるのである。

さて、曹操高陵の画象石は、全てが破壊され、断片化してバラバラの状態となっており、殆ど原姿を留めない。とするならば、それらの画象石は、果して陵墓の何処にあったのか。

そのことについては、『曹操墓の真相』（平成23年。原著は、二〇一〇年刊）という書物が[28]、大変示唆的な情報を与えてくれる。同書一章によると、二〇一〇年一月二十四日に、後室の後部の舗地石上に、縦一・〇二米、横二・四二米となる、石室等の置かれた跡に残る、六個の圧迫痕（印痕。12糎×12糎）が発見されている（76、77頁。原著57頁）。図十九は、後室に残る、それら六個の圧迫痕の所在を示したも



図十九　後室の圧迫痕



図二十　曹操高陵出土瓦当

のである[29]（私に矢印を加えた）。曹操高陵の「墓壁には画象石を「はめ込んだ」痕跡はないことが確認され」（77頁。原著58頁）ており、「また、「画象石の破片はすべて、同一建築物のようで」（77頁、原著58頁）、さらに石彫の瓦当（軒先を葺く丸瓦）などが、同時に出土していることから[30]（図二十）、同書は、画象石の断片について、墓主の遺骸をいれた木棺を収めるための、石室（石椁）の一部であろうと推測している（78頁、原著58頁）。なお曹操高陵からは、曹操のものと思しい頭骨や、木棺の残留物、二十糎を越える鉄製の棺釘なども出土している。すると、図三の申生図などは、曹操の遺骸を入れた木棺の外を、直接に覆う、石室の壁面に描かれていた可能性が高い。それは、驚くべき事実であって、画象石の断片によるその石室の復元が、何より期待されるのである。

一・〇二米×二・四二米という、圧迫痕から推測される、その石室の大きさは、例えば武梁祠の一・四〇米×二・四一米（×高一・八四米）に対し、縦（奥行）こそ四〇糎弱短いものの、ほぼ同じ規模のものと想像される。一方、後のものではあるが、有名なボストン美術館蔵北魏石室（寧懋石室、五二七年）のそれ（〇・九七米×二米〈×高〇・九七〉）と較べると、横は約四〇糎大きいが、縦（奥行）は、殆ど違わないことが分かる[31]（図二十一）。

もし曹操高陵出土の画象石群が、石室形態の画象石室を形成するとするなら、それらが例えば図二（図一）に見られる如く、数層に亙る孝子伝図、列女図、列士図を描いている点、明らかに武梁祠のそれらを受け、例えば両側に上下二層の孝子伝図二図、計四図のそれを有するボストン美術館蔵北魏石室（図二十）などの先駆となることなど、北魏時代に花開く孝子伝図の様式成立を考える上で、極めて重要な一級資料となることは間違いない。

図二十一　ボストン美術館蔵北魏石室

〔注〕

(1)賈振林氏『文化安豊』（大象出版社、二〇一一年）

(2)図一は、賈氏注(1)前掲書43頁に拠る。

(3)河南省文物考古研究院『曹操高陵』（中国社会科学出版社、二〇一六年）

(4)図二は、注(3)前掲書十章十五節233頁、図一五二に拠る（以下も同じ）。本画象石は、盗掘により一旦、外に持ち出され、後に警察によって押収されたものの一点である。なお注(1)前掲書には、本画象石を含む計六点の押収品の写真が載っているが（39―43頁）、注(3)前

掲書十章十五節は、その内の四点の摸写図が載るのみである（233―236頁。小さく砕けた断片を除く）。

(5)注(3)前掲書十章十五節232頁。なお関尾史郎氏『三国志の考古学 出土資料からみた三国志と三国時代』（東方書店、令和元年）二章四節は、本書によって、申生図をも含む本画象石（図二）の内容を、丁寧に紹介された（後藤昭雄氏教示）。関尾氏による申生図の解説部分を示せば、次の通りである（92頁）

第二層から見ていくと、「前婦子字申生」は春秋時代、晋の献公の太子だった申生だろう。献公とその後妻である驪姫に疎まれ、最後は自死することになる人物である（『史記』巻三九晋世家）。題記を附された人物が短剣を自分の首にあてているのは、自死の場面を表しているのであろう。とすると、「晋沙公時也」とある「沙公」とは献公のことではないだろうか。屋根のある構造物の中にいるのはその献公、その手前の小さな構造物の中でようすをうかがっているのは驪姫か

(6)幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15年）

(7)拙著『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、平成13年）Ⅱ一参照。

(8)拙稿「申生贅語―孝子伝図と孝子伝―」（『密教図像』22、平成15年12月。後、拙著『孝子伝図の研究』〈汲古書院、平成19年〉Ⅱ二3に再録）

(9)図四は、容庚『漢武梁祠画像録』（考古学社専集13、北平燕京大学考古学社、民国25年）五十二―五十四に拠り、下は、石索三に拠る。図五は、山東石刻芸術博物館『山東石刻芸術選粋』漢画像石故事巻、六輯三〇に拠る。図六は、架蔵拓本に拠る。図七は、山東石刻芸術博物館提供の写真に拠り、下は、『文物』92・12、76頁図三に拠る。図八は、『文物参考資料』58・4、36頁図二に拠る。

(10)宮崎市定氏『史記を語る』（岩波新書黄84、岩波書店、昭和54年。後、宮崎市定全集5史記〈岩波書店、平成3年〉Ⅰに再録）

(11)太平記の申生譚（驪姫譚）については、かつて述べたことがある（拙著『中世説話の文学史的環境』〈和泉書院、昭和62年〉Ⅱ二1参照）。

(12)注(3)前掲書十章五節四170頁、図一二一（拓本左下。178頁）、十四節231頁

(13)両孝子伝の本文は、注(6)前掲書による。類林所引逸名孝子伝の本文は、金、王朋寿撰類林雑説一・1所引による（嘉業堂叢書本により、陸氏十万巻楼本影金写本を参照した）。

(14)王恩田氏「泰安大汶口漢画像石歴史故事考」（『文物』92・12）。なお、先だって劉敦愿氏「『山東漢画像石選集』中未詳歴史故事考釈」（『東岳論叢』84・2）は、『山東漢画像石選集』（斉魯書社、一九八二年）図版八〇（図一八二）の嘉祥宋山一号墓二石3層、及び、『文物』82・5、64頁図二の嘉祥宋山二号墓一石3層が、「晋献公殺太子申生」図であろうことを指摘する（前掲図六、図七）。

(15)中国画象石全集1山東漢画像石（中国美術分類全集、山東美術出版社、河南美術出版社、二〇〇〇年）図版説明二三〇、76頁）

(16)泰安市文物局、程継林氏「泰安大汶口漢画像石墓」（『文物』89・1）

(17)現存する申生の孝子伝本文と、穀梁伝その他の諸書をめぐる問題については、注(8)前掲拙稿を参照されたい（その拙稿においては、穀梁伝にある犬の記述を見落としていた。謹んで訂正する）。

(18)図十三が金日磾図であることは、朱滸氏「曹操墓画像石之〝金日磾〟〝貞夫韓朋〟〝魯秋潔婦〟故事考」（『美術考古研究』28、二〇一八・四期）に指摘がある。なお金日磾図については、注(8)前掲拙著Ⅱ一2を参照されたい。

(19)図十四上は、隷続六に拠り、下は、内蒙古文物考古研究所、幼学の会、内蒙古博物院『和林格爾漢墓壁画孝子伝図摸写図輯録』（文物出版社、二〇一五年）10頁上に拠る。

(20)曹操高陵の画象石の作風について、楊愛国氏に、それが武梁祠を始めとする、山東省の後漢の画象石と一致し、或いは、山東省の工匠が当地に赴いたものかとする、非常に注目すべき説があるが（『中国文物報』二〇一〇年十月一日「加強基礎研究―曹操高陵考古発現専家座談会発言摘要」）、一方、図十三と図十四下に看取されるように、内蒙古

自治区の孝子伝図などとの幅広い連関にも、注意を払う必要がある。

(21)図十五は、注(3)前掲書十章五節五180頁、図一二三に拠る。

(22)図十六左は、注(3)前掲書十章五節五179頁、図一二二に、右は、彩版九二に拠る。図十七は、同十章十五節235頁、図一五四に拠る。図十八上は、賈振林氏注(1)前掲書40頁、下は、注(3)前掲書十章十五節236頁、図一五五に拠る。

(23)魯秋潔婦図については、拙稿「南京博物院蔵後漢画象石の魯秋胡子図―新出の列女伝図について―」（『京都語文』23、平成28年11月）を参照されたい。図十八は、そこに加えるべき一図である。

(24)注(8)前掲拙著II二1また、II二2

(25)楢山満照氏「後漢鏡の図像解釈　中国美術史上における儒教図像の意義」（『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア　三角縁神獣鏡と関連鏡群の諸問題』（アジア遊学237、勉誠出版、令和元年8月）I所収参照。

(26)関尾氏注(5)前掲書二章四節、滸氏注(18)前掲論文

(27)なお賈振林氏注(1)前掲書41頁には、図一（図二）の連れと思しい、五層から成る貴重な画象石の原石写真が載り、その第四層などに描かれる図像も、明らかに何らかの列士伝図と見られるが、例えば注(3)前掲書等に未収載となっていることは、今後の課題とすべきである。

(28)河南省文物考古研究所（渡邉義浩氏監訳・解説、谷口建速氏訳）『曹操墓の真相』（国書刊行会、平成23年。原著は、河南省文物考古研究所『曹操墓真相』〈科学出版社、二〇一〇年〉）

(29)図十九は、注(3)前掲書五章三節70頁、図二六に拠る。

(30)図二十は、注(3)前掲書十章五節四171頁、図一一四に拠る。

(31)図二十一は『ボストン美術館東洋美術名品集』（ボストン美術館東洋部、一九九一年）図版131に拠る。

〔付記〕

小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環であり、呉強華理事長の御高配に心から御礼申し上げたい。

（くろだ　あきら　日本文学科）

二〇一九年十一月十二日受理